

セツ なみ

No.60



ひと 言 子どもの貧困

高橋 満 (センター運営委員)

子どもたちの学校外活動は、英語では out-of-school time activities という。わたくしたちの常識では放課後の子どもたちの「居場所づくり」と活動が思い浮かぶ。

ところが、アメリカの学校調査をしたときに、学校外活動には「始業前」と「放課後」があることを知って不思議だった。なぜ、始業前に子どもたちを学校に集めるのか。すぐわかったのは、こういうことだ。学校外活動では、宿題をするだけでなく、家庭で朝食をとることのできない子どもたちに朝食を与え、栄養補給を図っているのである。放課後もまず栄養補給だ。なぜなら、アメリカでは10000万人を越える子どもたちが飢えと飢餓に瀕しているという。

子どもの貧困が耳目を集めはじめている。地域的な格差をもっているが、すでに学校の半数以上の児童が就学援助を受けている学校さえも存在するという。経済的理由で義務教育を受けることが困難な子どもたち。そんな子どもたちが半数を越える。

子どもの貧困対策という文脈での居場所づくり。そうならないことを願わずにはいられない。

目次

ひと言	高橋 満	1
第17回総会 記念講演(要旨)		
子ども理解	一そして教育実践・教師像の今日的課題	2
	田中 孝彦	
教育実践検討会報告		
中学校体育—バレーボールの実践		11
矢部 英寿 黒川 哲也	高橋 智穂	
千葉瑠依子 中森 孜郎		
図書室から		
気軽に入りにできるように	佐藤 弘子	18
私と旅		
アジアの空の下で	鴫田 勝彦	20
俺の旅の足はバイク!	藤原 聡	21
成長する子ども・模索するおとな		
—働く親たちの集まりの場から—	清岡 修	23
センターのうごき		24
本の紹介		24

第17回総会 記念講演（要旨）

子ども理解 —そして教育実践・教師像の今日的課題

田中孝彦さん（武庫川女子大学教授）

1、子ども・若者の声を聞く

生きて成長して学んでいくのは子ども自身。子どもの生存を援助するとか教育するという実践の基本は子どもから出発して子どもに戻るということ。そこでは、子どもと関わりとうとする者が、子ども自身が考えていることを聞く。聞くという基本のことから話を始めます。

4月25日に沖縄の読谷村広場で、普天間基地の早期の閉鎖と返還を求め、そして県内移設に反対する大集会が開かれました。そこに多くの子どもや若者の参加がすごく特徴的だと思いました。二人の高校生の発言の主な内容を紹介します。

ひとりの女子高校生が、「私は二年前普天間高校にとってもわくわくして登校したことを覚えています。しかしグラウンドに出れば、騒音とともにやってくる低く黒い影、授業中でもテスト中でも容赦なくすべてを中断させる音。学校までの通学路は、どこまでも長い基地のフェンスが続きます。あれ、こっつて日本だよな。一体フェンスで囲まれているのは基地なの？ 私たちなの？ と、



一瞬考えてしまいました。入学から二年経ち、私は自分が変化していることに気づき、自分が怖くなりました。仕様がな、いつものことと思う自分がいたのです。私の感覚は鈍くなっていたのです」と。

つづいてもう一人の女子高校生は、「沖縄にはさまざまな気持ちを抱く人がいます。基地で働き生活の基盤をつくっている人。反対運動をする人たち。基地で働く多くの外国の人。すべての人が一生懸命生きているからこそ、沖縄はいつも矛盾を抱えています。私にはそれぞれの立場の人の考え方を判断するだけの人生経験がありません。でも、私は純粋に素直にこの問題を考えてみて、やはり基地は沖縄には必要ないと思うのです。私たちの通う普天間高校では、一人ひとりが基地問題について考え始めています。この基地問題を日本のすべての人が自分の問題として考えてほしいのです」と。

ぼくは、この高校生たちの発言を読んで、こういう種類の発言は何か与えられた情報を頭の表面で操作するだけの学力では用意できるものではないと感じました。この二人は、生活と基地の問題について自分自身がこれまでの日々の暮らしの中で実際に感じ考えてきたこと、それから家族や地域の人々の生活や言葉、そういうものを丁寧に振り返って発言を準備したに違いない。これまでの沖縄の学校生活の中で重ねてきた学習、特に戦後の日本の歴史と沖縄の歴史についての学習を振り返って原稿をしたためたに違いない。この二人は、こうした発言の内容を同じ世代の若者たち、特に普天間高校の生徒たちという相談し、繰り返し相談しながらまとめたに違いない。だからこそ、この二人の、やはり沖縄の平和な生活に基地はいらないという結論、日本のすべての人々が、自分の問題として考えてほしいという呼びかけ、そうすると必ず何かが変わるのではないかという希望、それらがこれを読んだときに強い真実性をもってぼく自身に伝わってきたのです。ぼくは、この二人の発言の非常に高い人間性というか、思想

性・倫理性、そこに育っている教養というものに刺激されました。この25日のちよつと前に、全国一斉学力テストが行われました。それがまた、もしも都道府県別に平均が出れば、沖縄は低いと出るでしょう。けれども、集会で発言した高校生を生み出す沖縄の人々の暮らしや沖縄の高校生の教養を簡単に低いと誰が言えるかとぼくは思いました。

問い直されるべきは、こういう高校生たちを含んだ沖縄の子どもの学力を低いと一つの物差しで、平均値で決めつけてしまう方こそ問い直されるべきだとぼくは思いました。これが一つです。

もう一つ紹介したいのは、神奈川県の小田原の旭ヶ丘高校の教師と父母と生徒たちが一緒に集まっていた旭ヶ丘高校の教育研究会で話をした時のことです。ぼくの話が終わった後、10人くらいの生徒会の役員たちが、この高校では授業料滞納問題が深刻な問題になっている、授業料が新たに広がっている格差と貧困化の中で授業料が払えなくて授業が継続できないというピンチに見舞われている友だちたちが少なからずいる、それによって、この私立高校の経営の大きな負担になるという事態も起こってきている、だから、生徒会としては授業料滞納問題をどう考えたらいいか、それを解決するということはどういうことだろうかということを考え、そういう活動を今中心的に取り組んでいると話をしてくれました。

その授業料滞納問題に対する取り組みを生徒会でやっていると報告した生徒会の役員たちの何人かが、次々と立って、自分史の話を始めました。

中学校時代に暴力を伴うひどいじめを受けていて、心身に深いダメージを受けて、医療と薬、そういうものの助けを借りてようやく持ち直し、この高校に入れて、苦しさや考えていることを受けとめてくれる教師や友だちに出会って、1年半くらい経って、生徒会をやるところまで来た、と。

もう一人の女子高校生は、中学校時代ほとんど学校には行っていなかった。不登校だった。たまに行ったときに、自分の存在が完全に忘れさられてしまっているような雰囲気があったらなかつたということを言っていました。その子もこの高校に来て、きつきを受けとめてくれる教師に出会い、一緒に考えてくれる友だちに出会って少しずつ元気を取り戻しつつあるという話をしました。

ぼくは初め、どうして授業料滞納問題の活動報告の後、この子たちがこういう発言を始めたのか、初めはわからなかつたんですが、だんだん聞いていくうちにわかつてきたような気がしました。それは、こういうことです。

確かに新たな貧困化と格差拡大の現実が広がってきて、経済的な問題が学業を続けられるかどうかという形で、私たち高校生にダメージを与えてきている。これに対してはすぐにでも経済的な社会的な対策が打たれなければならない。けれども、私たちが抱えている問題はそれだけではない、育ってくるプロセスで、この社会でさまざまな耐え難い出来事にあつて、自分たちは相当深い傷を負ってきたと語つたんだと思ひました。だから、今授業料が払えないでいる高校生たち、同級生たちが受けているダメージは、授業料だけではなくて、もっと深いものがあるだろうというふう

に私たちは想像できる。そう思ひながら、授業料滞納問題に取り組んでいるということ、彼等は語つたんだと思ひました。

こういう発言をする高校生を出す教師たちの実践というのはなかなかのものだと思ひて聞きました。

ぼくは研究と生活の基本に、子どもと若者の声を聞くことを置いています。こういう発言を聞いていて、今僕は日本の多くの子ども・若者の状態について、こういうふう

に判断しています。それは、競争とか自己責任を強調して、福祉や医療や教育、人間の生活の基盤を支える営みを商品化して、そして日常の人間関係を敵対的なものにして、貧困と格差を新たに拡大してきた新自由主義の四半世紀というものが、日本のこの四半世紀だったとい

うふう

に思います。それは同時に、ダニエル・ベルという新自由主義の古典と言われている本を書いた人がはつきり言っていることですが、新自由主義は全体的に福祉を切り捨てたり、教育を切り捨てたりして小さな政府を目指す、しかし例外がある。それは、国防と軍事の分野である。自由世界を守るための国防と軍事については、必要な金を投入するというふう

に言っているわけです。新自由主義とそれに見合った国家主義というか、そういうものがあるわけですね。今度の沖繩の問題、そして急に抑止力なんていうことを言い出した背景には、新自由主義の必然というものがあると思ひます。

ですから、そういう国家の登場の仕方というものもさまざまな子どもに傷を及ぼしている大きな原因になっていると、僕は考えられています。そういう新自由主義の四分の一世紀の中で、この時期に日本の社会に生まれ落ちた多くの子ども・若者たちが、生育のプロセスでさまざまな人間として耐え難い出来事に遭遇して、心身に傷を負いながら生きてきている。そういうふう

に僕は見えています。外から見ると、本当にとんでもない子どもの姿というのが目に映りますけれども、その奥には、その子たちがこういう社会に生まれ落ちて、心身に傷を負っているというふう

2 「教育改革」の質を問う

2006年の末に47年教育基本法が「改正」されました。その

後、毎年全国一斉学力テストが行われるようになって、今回若干性格は変化しましたが、4年目もまた行われたわけです。そして教員免許更新研修が実施され、学習指導要領が改定されました。こういう教育改革が教育の荒廃を正すという名のもとに進められてきたわけです。こういう教育改革の前提には、どういう子どもの見方があったかということを確認しておきたいと思えます。

中山某という文部科学大臣、彼は、こういうことを言っています。子どもたちの学習意欲と学力が低下している（これは、国家的な学力テスト問題などの成績などを挙げて）。それから、規範意識が失われてきている。生きる力が衰弱してきている。というふうに子どもたちの世界の外側から一方的に断定する子ども・若者観をこれでもかこれでもかと語っていました。

それは、中山元文部科学大臣、だけじゃなく、その頃の日本の社会の表面に一つの雰囲気として、子どもたちの状態をまったく否定的に断定する見方が広がった時代、だったというふうに思います。そして、そのあと学習指導要領が改訂されたわけですが、これは例えば国を愛する心の強調とかそういう問題も大きくありますが、日常的に行われる教育活動をどうするか、こういうことを言っています。

基礎的知識が重要だということは言うまでもない。同時に、これから重視しなければいけないのはその活用力である。これは、全国学力テストが基礎基本のテストの部分と、活用力の部分に分かれていて、活用力はある種の具体的な生活場面が問題として出てきていて、例えば4人家族でファミリーレスト



ランに行きました。そして、何と何と何を食べてどうしましたと。そういう状況を問題として与えておいて設問を出し、問題を解かせるわけです。

それから、もう一つ特徴的なのは、コミュニケーション能力の強調ということが非常に強く行われていることです。

僕はこういうものが広がっていると、日本の学校が基礎と活用力とコミュニケーション能力のスキルとドリルの学校になっていくというふうな本心に心配しているところです。

こういう学校の問題は、一人ひとりの子どもが生存・成長のプロセスで抱く生活感情や問いから遊離した、形式的な「教育」「学習指導」と、それに馴染まない子をおかしいと言ってさらに訓練しようとする。社会の中で傷を負ってきている子どもものに、さらに塩を塗るような学校の状態が蔓延してしまうのではないか。

そういうふうには僕は心配をしているところですが。日本の社会全体もそういうふうになりかかっているところがあります。

生まれてから死ぬまで百マスのドリルをやっていないと、脳が活性化しないみたいな、そういうものが任天堂の何とかというゲームみたいなものになって、電車の中でおじいさんとかおばあさんがやっている。学校に入る前の子どもが百マスをやっているとか。何か変なことだと思えますね。そして、あれで脳が活性化しているというのは、脳科学というのを疑うべきだと思つてます。川島隆太先生たちに本当に今脳科学の最先端では何が問題になっているかということ、国民や教師がちゃんと聞く機会をつくるべきだ。百マスの計算で、どこの脳が動いているかって、赤くなるとか青くなると

か言ってるんですが、あれは子どもの自然との直接関わりを妨げるなどと大きく問題になったテレビゲームとか、ああいうのをやっても赤くなるんですね。だからテレビゲームを批判していた人がそれを撤回して、百マス計算を推進する人がテレビゲームも悪くないと言いだしたとか、そういうことも起こってきていて、こういうのはほとんどエセ科学というか、そういうものが今の国民の不安に乗じて広がってきて、0歳から100歳まで百マス計算って、よく考えてみれば本当にはかばかしいことが、今の日本に広がっているというふうに思います。ただ、これは笑い話じゃなく、それに近いようなことが、日本の学校を支配しようとしているという恐ろしさというものを、僕は感じています。

3、「危機」に芽生える

子ども理解と援助観・教育観の深まり

つい最近僕はある保育者から、少し長い時間話を聞く機会がありました。その保育者が紹介したのはA君という年長クラスの子どもだったと思います。男の子です。

Aくんは両親が離婚して、父親と一緒に暮らしています。うちには季節労働者のおじいさんと介護が必要なおばあさんがいて、A君のお父さんは、朝早くから夜遅くまで家計を支えるために働いているわけです。今これぐらいの困難を抱えている家族はいっぱいいますね。A君は、朝早くそのお父さんに連れられて保育園に来て、そして夜ぎりぎりにまたお父さんに迎えてもらう。夕ご飯はたいいて保育園からの帰り道にパンを買って食べさせてもらう。そういう毎日常多というふうに保育者の方は語っておられました。このA君は割合おとなしくしているようです。寝る時間が短くて、朝ボーっとしているんじゃないかと思えます。午後になると、些細なことで感情をコントロールできなくなつて、友たちを突き飛ばしたり大声でおどしたりモノを投げまく

つて暴れるようなことがある。フェンスによじ登つて、こんな保育園なくなればいいって叫んで、冷たい眼差しを保育者に向けることもあると言っていました。

特に僕が印象に残っているのは、やっぱりこういう保育園でも比較的早く迎えに来てくれる早帰りの子どもと、いつでも最後の方になる遅帰りの子どもに固定的に分かれてくるわけです。このA君は、遅帰りだったわけです。この保育園には、家のおもちゃは保育園に持つてこないようにするという決まりがあつたそうです。比較的早く帰れる男の子が、ある日からおもちゃを持つてきたときに、このA君はものすごくその持つてきた子に食つてかかつて突き飛ばして攻撃したというんです。それは、保育園のルールだからなんで破るんだという気持ちも幼いながらあつたんだと思いますが、やっぱり早く迎えに来てくれる子どもたちに対する、早く迎えに来てもらえない自分たちとの複雑な気持ちが蓄積していたということは明らかだと思ひながら、僕はこの先生の話を聞いていました。

この保育者の方によると、この保育園では全職員でこの子の要求は何なのか。どう受けとめ支えたいのかということについて話し合い努力はしてきたんですが、A君はなかなか落ち着かない。また友たちと遊んでもらえなくなるのではないかと、自分のことを誰も好きになつてくれないのではないかと、こんな思いをするくらいなら保育園なんかなくなつてしまえばいいというような、保育所の方は底なしの不安感と名づけておられました。底なしの不安感がA君を包んでいるようだったと語っておられました。ある日、A君はこんなことまで言っ



たそうです。「保育園がいかなのだわ。父ちゃんが働いたお金をいっぱい取ってくるくせに」って。5歳の子どもがこんなことを言うかと思うようなことを叫んだそうです。

このA君のことを話ながら、この保育者は次のようなことを語っておられました。

A君に限らず子どもらしい喜怒哀楽の感情をまっすぐに表現できない子どもたちが増えているような気がします。ですから保育では、目の前に起きた現象面だけを取り立てて問題にはしません。そんなことをしても、その子の本当の理解には行き着かないからです。保育者がどんな行為にも必ず理由があるはずだと受けとめて、みんなでその背景を分析し、子どもの本当の気持ちを探る力量を身につけなければならぬと感じています、と。

これまでなら、そんなにイライラすることがあるのなら言葉にしているってごらん。みんなの前で話してごらん。そしたら受けとめてくれるよというような形で解決していたものが、もはやそれでは済まない現実がある。荒れや閉じこもり、簡単には意味のわからない行為の意味を一人ひとりの子どもの生育史に添って理解できる保育者にならなければならない。そういうことを語っておられました。

保育の場合に限らず、例えば福祉で困難を抱えた子どもと接触しているケースワーカーとか、そういう人々も、それから医療の場で困難を抱えた子どもを支えている医者とか看護師とか、その他医療従事者の人々も、それから心理臨床の場で困難な子どもを抱えている臨床家たちも、それから教育現場で困難な子どもたちを支えている教育者たちの中にも、今の保育者が言っているような感じの発言がすごく出てきています。民間教育研究運動で試され済みの教材や教育技術であっても、今の子どもたちの不安にそれだけでは届かないことはいくらでもある。届かないのは子どもが悪いんだと言っているのは済まないという、そういう発言が出てきています。

その点で、もうちょっとつけ加えておきたいと思います。アメリカの精神科医のジュディス・ハーマンという人の『心的外傷と回復』という本があります。これは90年代にアメリカで出されて、90年代の後半に日本で訳されました。ハーマンは、この本の中で戦争・災害・事故・犯罪・暴力・虐待……と、本当にこの4分の1世紀は、それまでになかったような人間として耐え難い出来事に世界中で多くの人々が遭遇してきた時代であり、そういう人間として耐え難い出来事に会った人々は、普通の人間の反応として心的外傷を負うんだと言う。英語ではトラウマと言われている。それは本当に人間の心身を混乱させるようなものです。ハーマンはこの本の中で、そういう心的外傷を負った人々に注目して、その心的外傷を負った人々が示す特徴的な諸症状というのを克明に書いています。

例えばですね、あるとてもひどい出来事に会って傷ついた人は、たまたまこの人なら私が出会った厳しい出来事とか辛さがわかってくれそうだと思う人に出会おうと、その人にしがみつく、依存する。しかし、しがみつかれた人は、たいていの場合その人がどんな出来事に出会って、どれだけ厳しかったのかなんてことを同じ大きさで感じ取ることは不可能ですから、たいていしがみついた人が期待するほどの対応はできない。そうすると、今度はその人への攻撃性になる。そういうふうな依存と攻撃が目まぐるしく交代するのが心的外傷を負った人々の一つの症状の特長だということを書いていきます。

こういうふうな理不尽な攻撃を受ける状態から安全を守られていくと、睡眠と覚醒のリズムを取り戻していったり、食事と排泄のリズムを取り戻していったり、活動と休養のリズムを取り戻していく。普通の生活リズムが徐々に戻ってくる。これにも長い時間がかかるんですが、そうなってくると心的外傷を負った人は、徐々に自分がどんなにひどいことに出会ったのか、あの時どんなに惨めだったのかということ語り始める。それが始まると、そ

の語りを聞いていくというか、そういう援助がものすごく重要になるということをはーマンは言っています。

こういうことをやっていくと、その人はだんだんあんな出来事は起こってほしくなかった出来事だったけれども、やっぱり自分の身に確かに起こったことだと認めて、それが進んで行くと、起こらなければよかったけれども、あんなひどい経験をしたから、同じようなつらい出来事にあった人のつらさを私は理解できるようになった、意味のあつた出来事だったと位置づけ直していくようになると言っています。そういうことが進んでいくと、危険に満ちた世界だけれども、もういつペン周囲の人々と結びついていこうと再結合の努力が始まる。それが始まったら、それを徹底的に支えることだというふうに言っているんです。この世界の4分の1世紀というのは日本だけではなくて、本当に非人間的な出来事が次々に起こった時代でした。百マスのようなエセ科学ではなくて、こういう本当の人間科学が私たちの中で共有されるということがすごく大事なのではないかと思えます。

もう一つだけ紹介したいのですが、アメリカにJ・Sブルーナーという心理学者がいます。1950年代の末にソビエトがスプートニクを打ち上げ、アメリカは科学技術競争に負けたというので科学技術教育の徹底した改革に取り組む。その時ブルーナーは、『教育の過程』という有名な本を出して、科学や文化のある種の合理性を持って構造化すれば、どんな子どもでも認識の発達もどこまでも促進できる、そういう本を書いたわけです。

ところが60年代の半ば以降になつてくると、そういうふうにしたんだけれども経済的・文化的に貧困層の子どもは、系統的にそういうふうな改革したはずの学校教育から落ちこぼれてくるという問題が起こったわけです。これはなぜなんだろうかということ、またブルーナーは深く政府の教育改革にコミットして考えたわけです。そして経済的・文化的に貧困層の子どもは、学校に入ったときのスタートの時点で、すでに遅れをとっているんだと考

えたわけです。そこでブルーナーは、私の考えが浅かったと反省したわけです。アメリカのすごいところは、ときどきそういうふうに本当に反省する人が出てくるということじゃないかと思うんです。ブルーナーはどういうふうな反省したかということ、1970年に有名な「貧困と子ども期」という論文を書いて、経済的・文化的貧困層の子どもが受けているダメージは、読み書き算という個々の能力、それをにわかに訓練したら取り戻せるというものだけではなくて、もつと深い世界の中で自分はどういう存在であるか、どういうふうに必要なとされている存在であるかという、それを仮に自己感覚と呼んでおきますと、その自己感覚に深いところでダメージを受けている。だから本当にこの事態に対処しようとしたら、社会の中での様々な人たちの家庭生活、文化的経済的生活の徹底的な平等化を推進しないと、この問題は解決できないというふうに言ったわけです。

もう一つは、学校のテストでこの子ではできるとかできないとか言われているものがあるにしてもその社会の中間層が比較的得意な操作とか何かがモデルになっていて、そもそもこの子たちが落ちこぼれているとか、落ちこぼれてないと言つて測っているテストそのものが、ある階級的・階層的性格を持っている。それを見直さないとダメだというふうな考えたわけです。

ところが、今の全国一斉学力テストみたいなもので測ると、その高さが現れないというか、それはその基準が限定されたものなんじゃないかというふうな考えるべきです。ブルーナーも、その頃そういうふうな考えたわけです。90年代になつてブルーナ



ーは、さらにもつと反省して、私は人間の全体的発達から知的な発達の部分を少し切り離して考えすぎたように思う。そこに對しての、何かうまくやる教育があると少し機械的に考えていたような気がする。そういうふうな反省して、本当に人間は自分の人生のなかの出来事やそこで感じ考えていることを物語りながら、他者に聞きとられながら自己をつくり出していく。それを徹底して援助していくのが、文化としての教育なんだというようになり、90年代に『文化としての教育』という本を書いていきます。ハーマンとかブルーナーのことを知るだけでも、僕たちは今日本の社会と子ども現実をどう考えたらいいかという一つの風穴というか、そういうものを開けることができるのではないだろうかと思ってお話をさせてもらいました。

4、教師たちによる教育実践と教師像の模索

これは都留文科大学時代のことなのですが、ある中学校の40代半ばぐらいの数学の先生が、どうしても大学院に入って勉強したいと現職のまま来られました。働きながら来られたわけです。4年かかって卒業をされました。この先生は、なぜ大学院に来られたかという、それなりに一生懸命教育実践をやってきたけれども、どうも今の子どもたちが求めているものとの間にズレが生まれてきているような気がして、子どもとじっくりいれない。このズレを問い直し、自分の教師像を問い直さないとダメなんじゃないかと思つて来られたわけです。

大学院で具体的に何をやられたかというと、自分のかつて担当して不登校だった子ども5人、会つても大丈夫だという5人に出会い直して、あなたが中学校時代不登校になったのはどういう原因があったのかということ聞き、その時学校や教師としての私の対応があなたに対してどういうふうに映っていたのかを聞きとつて、それを材料にしながら教師像を問い直すという作業をされ

たわけです。

かいつまんでお話ししますが、この人が会つた不登校だったBさんは「中学時代に精神の病になつて働けないお父さんを、その家の実権をかなり握っているおじいさんがひどく罵るといふ毎日が始まつた。そしてお母さんは家計を支えるために働きに出て、それで中学生になつた途端に私の家庭生活が真つ暗になつた」と話したそうです。

それからもう一つ、「しかし、たまに学校に行つたときにすぐ覚えていけることがある。それは、先生と一緒に校外学習というので近くの有名な神社へ行つたときの楽しさが忘れられない」と語つた。もつとどこかへ連れて行つてほしかったというふうに語つたと言つていました。そこからこの先生は、もつと長いその子の語りなんですけど、それを何度も読んで考えてこういうことを書いておられたんです。

私は、その当時もこの子の家庭にかなり大変なことが起きていくというのほだいたい察知していた。そして、この子が中学生の力ではおよばない大きい問題を、できたら一緒に考えてくれる大人を求めていたというのほだいたい分かつていた。なのに、私はその問題の大きさに怯んでというか、家の問題に立ち入るなとか、私が責められるという気持ちがあった。

もう一つは、どこかへ連れて行つてほしかったというのほだいたい象徴的だと思う。厳しい家庭生活に問題が起こつたときに、それはどんなにがんばつても中学生で解決できないということはいくらでもあるわけですね。そういう時に、ただその問題を見つめよと言つただけではなくて、一回そこから出してやつてというか、そしてそれは遊びの世界であつたり文化の世界であつたり学習の世界であつたりするわけですが、家の問題を一時忘れてと



いうか、そこで遊ぶことができ、その遊ぶ世界があるので、また厳しい現実にも向き合っていけるといえるような、そういう遊びや文化や学習の世界をこれこそ教師として創ってやらなければならなかったのに、それが十分できなかったというふうな反省をされてきました。今言ったのは、過去の自分の至らなきの総括のようにみえますが、実はこれから思春期に付き合っていく教師像はどうあるべきかという教師像の探求でもあったわけで、他者に守られながらいたいの子どもが困難を示したときに、その背景にある家族や社会の問題と一緒に子どもと向き合っていけるためには、教師同士の支え合いが必要だということと、それからそこから一旦出してやって、それを対象化していけるような学問や文化や遊びの世界を子どもに出会わせてやるというか、そういうことがこれからの教師として重要なんじゃないかという結論を書いて、現場に戻って行かれたわけです。

子どもを理解するということは、その背景を一緒に理解するということでなければならぬ。だけど、今日本中の学校と教師はある程度察知しながら、そこにどう踏み込んで行ったらいいかということに、全体としては踏み出せないというところではないかなというふうに思います。そういう時にすぐ踏み出すのは困難ですけども、この子どもをどう理解したらいいか、その背後に何があるか、学校でできることは何かというふうなことをゆつくり異論も含めて話し合っていく子ども理解のカンファレンスというふうなものが、時には必要な専門家も招いて教師の主導でやっていくというようなことが本当に大事になつていくんじゃないかなと思つてるところです。

日本の教師たちの中に平凡なように見えるけれども、実は非常に大事な人間形成とそれに対する教育的働きかけの直感が生み出されていて、それを疎かにしないで共有して確認して共通財産にしていく。そういう努力が本当に大事になつていくんじゃないかと思つています。そして教育行政がやるべきことは、教師

の指導力が低下しているというふうな責めることではなくて、それから上からの指示通りにやる教師を高く評価し、しない教師を低く評価して、給料にまで差をつけるというようなことではなくて、こういう子どもに向き合つて生まれてくる大事な直感や経験を教師同士が共有して深めて行こうとするその努力を励ましていくことだと思つたわけです。

5、やごいじ

ぼくは教育研究を始めて以来、ずっと教育は子どもから始まつて子どもに返る。子ども研究はずすような教育研究は、教育研究じゃなくなるといふふうに言つてきてだいぶ年とつてきました。いま、大人が子どものことをこれだけ考え続けながら一生生きるつてどうしてなんだろうとかと思つています。大江健三郎のものを読んでいたら、エッセイに「未来に向けて回想する」という言葉があつたんです。今、日本の社会をどうするか、そのために自分はどう生きるかが問われていると思つています。子どものことを考えるということは、そのことを自分のためだけにだつたらただの回想になるわけですが、目の前の子どものことに重ねて考えていくということは、この目の前の子どもが大人になつて生きていくというか、その未来の社会のありようを考えるということになるわけですから、大江健三郎つてやっぱり言葉の職人です。日本人は、今本格的に未来に向かって回想する必要がありますのではないかと思つたことを最後につけ加えて、終わりにします。

(*講演の記録を編集部がずいぶん削つてまとめました。田中先生にご覧いただいておりますので文責は編集部にあります。)